

その濫觴はしらねども、僧形にてなべて法師ともいへば、乞食頭陀鉢ひらきの類なる事は知られたり、今は醫道按摩古くは腹といふなどを業とすれども、昔は琵琶法師として專びはを彈ず、今昔物語に、木幡の里に目つぶれたる法師の世にあやしげなるが、琵琶の妙手にて有しに、博雅三位の習ひたりし事など見ゆ、平家物語を信濃前司行長が作りてよりこれを語る、平家物語の琵琶は、柱一ツ樂のよりは多く、今も是をなせどもてはやす人すくなければ、知らぬ盲人多く、なべてはつくし琴三絃を專業として、人にもをしふ、三絃はもと淨りの方と、遊里の妖曲にのみ彈きしを、移りては常の家にもひくこと、なりたれど、猶婦女兒のみの戯にて、おのが幼年なりし比までは是はよき人は、をさくもてあそばず、たまく彈く者を遊蕩子遊冶郎とそしる故に、習はむとする者も人目を去るおほとなりしが、今はなべてよろしきほどの家にて、誰もひくものとなりたり、さる故に教ふる者も又多くなりて、盲人のみならず、男女ともに此道の師にて生活する者、流をたて派をわかつて名目多し、こは男は多くは幫間、又は戲場觀物師の屬なるもあり、もとこのめるより落魄して、さる師となり遊蕩子にて過るもあり、女は前にいふ藝子のうちに、年たけて色おとろへたる者、又遊里ならずして、町藝子などといふ一轉の者などもをしへ、男の所にいふ如く、このめるよりして習性となり、遂に業とする者もあり、盲人ならぬは戲場の屬の他は、本業とたて、世々にするにはあらず、素人の體なれども業とするに至りては賤し元來此やうに返て、その曲淫靡なれば、もて遊ぶ人の意も、いつとなくそのかたにすべてかゝる遊民は、うつるを、まして明くれに業とするにいたりては、皆放蕩子の風をなせり、有て益なく、なくてはたらはぬ事なし、禁じて可なり、又女瞽あり、七十一番職人盡歌合女盲と出て、鼓を腋にかゝへうちて謠歌する絃あり、今はさることはたえて、これも琴三絃按摩のみなり、座頭の如き階級もなし、又男まうくる事は禁なり、

〔町奉行町年寄覺書〕座當之事略○中